

あけのほし 2014 年 5 月

## 「聖書の不思議さ」

菊田行住

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』

(マタイによる福音書 20 章 1 - 12)

わたしは大学3年生の時に、社会福祉学科の先生に連れられて、横浜にある通称「寿(ことぶき)町」で行われるキリスト教教会主催の青年ゼミに参加しました。寿町は、日本三大ドヤ街の一つで、山谷、釜ヶ崎に並ぶ日雇い労働者が集まる地区のことです。この寿青年ゼミに参加しようと思ったきっかけは、その福祉学科の先生が授業で見せてくれた一本のビデオがきっかけでした。

そこでは、大阪の西成区にある釜ヶ崎のドキュメンタリー番組が流されました。その番組の中で、仕事にあぶれた人々が、長い行列を作って教会が提供する一杯の炊き出しの雑炊をもらおうとしていたのです。わたしは福祉学科で学んでいた一人のいのちの尊さを大切にするという日本社会の福祉理念と、現実の違いに強い衝撃を受けました。社会福祉学科では、いのちのセーフティーネットとして、生活保護法という制度があるのだと学びます。日本に住んでいるという理由だけで、最低限のいのちの保証だけは受けられるという人権保護の要となる制度です。しかし、その一杯の雑炊をもらうために朝早くから長い行列を作っている人々の光景は、そのような法律の保護に、大きな疑問を投げかけました。いったいどうしてこの人だらけ、生活保護を受けずに、こうして命の危機に瀕し、そして一人の人間としての尊厳を失ってしまっているのだろうか、悩んだのです。

その質問を先生にしてみると、今度夏休みの期間に寿町というところで青年ゼミがあるから参加してみないかと誘われました。そこに行ってみたらあなたの疑問に答が見つかる

かもしれないねと言われたのです。

寿青年ゼミでは、一通り日雇い労働者の方々が置かれている状況が説明されましたが、それは一言で言えば、労働力の使い捨てが原因だということです。特に多い職種として建設業が挙げられましたが、建物を建てる時だけ日払い契約を結び、建物が出来上がれば、契約は解除されるのでその後の保障は何もありません。つまり、その契約形態は非常に不安定で、けがをしたり病気になったり、年を重ねて高齢になると、一気に労働力としての価値が下がり、就労からあぶれて行ってしまうわけです。だいたい、当時において50才を越えると、仕事がなくなるのだと教えてもらいました。

その他にも、ここに集まってくる日雇いの人々は、家族との関係が断絶している人が多く、仕事にあぶれた時に、頼れる身寄りがないのだといいます。そして生活保護法のことですが、確かに制度としてあり、それを受給出来ている人もいるのですが、その崇高な理念と、実際の運用では隔たりが大きく、積極的に生活困窮者を保護して、再び労働者として再出発して行くという考えよりも、いかに財政負担を減らせるのかといった方向に、考え方が向いているのだということでした。このことを整理して言ってみますと、わたしたちの社会は、実は、「わたし」を一人の大切な人間だと見るよりも、いかに社会にとって価値のある有益な労働力かという基準で見ているのだということが、言えるのだと思います。役に立つ人間は重宝がられるけれども、役に立たなくなると、途端に冷たくされて行くのだということです。

このような、日雇い労働者の方々の実態を知らされることで、わたしたちの社会が、何を一番の基準として廻っているのかを知らされた思いです。そして、その事に続いて、冒頭の聖書の箇所が、朗読されたのです。そこでは、夜明けからぶどう園で働いた者も、朝の9時からの者も、12時、3時の者も、終いには、日暮れ前の午後5時から働いた者さえ、同じ賃金がもらえるのだという話が、なされました。この時は、このたとえ話が、何を意味しているのかよく分かりませんでした。それでも、あまり働くことの出来ない人間にも、ちゃんと生活するための最低限の糧を与えてくれるのは、ありがたいことなのだ、感じました。

すると、同じグループになった一人の日雇い労働者の方が、この聖書の話は、実際にあるんだよと、話してくれました。それは、まだ、景気が良い時の話ですが、ドラム缶の清掃の仕事に日雇いで行っていた時に、人数合わせて、大して働くことが出来ない精神疾患を抱えている人も、同じ賃金で雇われていたんだということでした。その人は、一日中、ドラム缶の上に座って、たばこを吹かしているだけで、同じ賃金がもらえたんだと、笑いながらおっしゃっていました。その精神疾患を患っている方は、薬の副作用のせい、若くして亡くなりましたが、ちょうどわたしもその葬儀に参列しました。そこで、交わされる故人を偲ぶ話の中には、似たようなエピソードが多くありました。彼の人生は、確かに大変辛い面も多くあったのだと思いますが、それでも何かその大変さごと包み込む、大きな力が働いてようにも思われたのです。それまでにしたことがない、不思議な体験でありました。